

本号の内容 「追悼」一一・二五「楯の会」事件より四八年 三島由紀夫と葦津珍彦（木川智）：1／【解説】暴論「辺野古二段階返還論」—絶対安全圏から基地を押しつける「本土」の傲慢が再び沖繩を傷つける（西山徹）：5／【連載】『倭姫命世記』を読み解く⑩「延暦儀式帳」と伊勢神道（柳凜）：8／一〇月活動報告：10／お知らせ・編集後記：20

1部 1000円
(別途送料160円)

一一・二五「楯の会」事件より四八年

三島由紀夫と葦津珍彦

神苑の決意 主筆 木川智

【追悼】昭和四五年（一九七〇）十一月二五日、「楯の会」隊士五名が東京・市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面統監部を急襲し、統監・益田兼利陸将を人質として自衛隊員に憲法改正のための決起を要求した。

「昭和元祿」とも呼ばれた当時にあつて、自衛隊駐屯地の襲撃と憲法改正を呼びかけるクーデター未遂事件は、世間を震撼させた。さらに事件を指揮した「楯の会」隊長が当代随一の人気作家・三島由紀夫氏であつたことと、三島氏が「楯の会」学生長・森田必勝氏とともに古式にのっとり切腹し、隊士の手

により介錯に至つたことも、センセーションを巻き起こした。

三島事件、三島・森田事件、「楯の会」事件などともいわれるこの事件は、事件直後より様々に批評された。佐藤栄作首相は「狂気乱心の沙汰」と一刀両断のもとに評し、中曽根康弘防衛庁長官も「迷惑千万」と断じた。一方で、事件直後から多くの人が三島氏の文学作品を買い求め、都内の書店から三島氏の文学作品は姿を消したといわれている。また三島氏の憲法改正と決起の呼びかけに多くの自衛隊員は

怒号を飛ばし、あるいは嘲笑したが、一部隊員に深刻な影響を与えたともいわれている。さらに多くの思想家や文学者にこの事件は大きな影響を与え、いまでも事件は語り継がれている。

戦後神道界を代表する言論人・思想家である葦津珍彦も、「楯の会」事件に衝撃をうけ、分析を試みている。

葦津氏は、早くも事件直後の一一月三〇日には「三島由紀夫自刃す 沈黙せる国民心理への影響」との記事を記し、翌月一二月七日付「神社新報」内コラ